

## 【研究ノート】

## 比較民話学とは何か

——その歴史・目的・方法——

高 木 昌 史

本「研究ノート」は、目下準備中の論文のアウトラインを描くものである。筆者自身の覚書 (Ad me ipsum) であるが、昔話を含め広く口承文芸学に関心を抱く方々に「比較民話学」の内容を、柳田国男の業績を背景に、多少とも紹介できれば幸いである。

我が国で口承文芸学の基礎を確立した柳田国男が、このジャンルの代表格である「昔話」(ドイツ語 Volksmärchen、以下「民話」とも表記) に関して特に注目したのは、驚くべき「東西の一致」であった(『郷土生活の研究法』、一九三五年)。現在ドイツで刊行中の『昔話百科事典』Enzyk-

lopädie des Märchens (第一巻、一九七七年) は、柳田のこの言葉に呼応するかのように、「物語の歴史的・比較的研究のための中(型)辞典」Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung を副題としている。

昔話は今日、文芸学、深層心理学、民俗学、教育学、フエミニズム等々、さまざまな分野で関心の的となっているが、いずれにせよ、このジャンルは「比較」vergleichen の視点を導入することによって、ますますその奥深い魅力を開示すると思われる。

以上のような状況に鑑みて、ここであらためて「比較民

「話学」という学問の〈歴史〉および〈目的〉と〈方法〉を再確認することにした。

## A 比較民話学の〈歴史〉

この学問がこれまで歩んできた足跡を大まかに辿ると、ほぼ次のようになる。

原点は、ドイツのグリム兄弟 Brüder Grimm、すなわちヤーコプとヴィルヘルムが編纂した『子供と家庭の童話集』Kinder-und Hausmärchen（いわゆる「グリム童話集」、以下 KHM と略記）の「原注」Originalanmerkungen に遡る。それには次の三段階がある。

- 1 KHM「初版」（一八一二／一五年）各巻末尾
- 2 KHM第二版（一八一九年）第三巻の「注釈篇」（一八二二年）
- 3 KHM第三版（一八三七年）第三巻の「注釈篇」（一八五六年）

3「注釈篇」（今日、レクラム版所収）には、「研究ノート」が収録されている。ヴィルヘルムがそこで紹介・解説している昔話（民話）の範囲はすでにグローバルな規模で

ある。（原書に関しては論文で触れる。）

（メモ）本学民俗学研究所の「柳田文庫」には、レクラム版の3「注釈篇」が収蔵されている。

次は、3「注釈篇」を大幅に改訂したボルテ／ポリファの『グリム兄弟「子供と家庭の童話集」注解』Anmerkungen zu den Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm, neubearbeitet von Johannes Bolte und Georg Polifka 全五巻（一九一三／一五／一八／三〇／三二年）（以下 B／P と略記）である。この「注釈篇」は、グリムの3「注釈篇」を土台に、ドイツの民俗学者ボルテとチェコの学者ポリファがその後収集・整理した世界中の類話情報を掲載しており、以後、昔話（民話）比較研究の金字塔となった。

（メモ）柳田国男はジュネーヴ滞在時と帰国後、この「注釈篇」五巻を揃えて、彼の昔話研究に活用した（「柳田文庫」所蔵）。

B／Pの直後、ボルテとマッケンゼンによって、本格的

な『ドイツ昔話辞典』が企画された。J.Bole/L.Mackensen: Handwörterbuch des deutschen Märchens (一九三三／四〇年)しかし残念ながら、この「辞典」は第二巻のGで頓挫してしまった。内容は今日的に見ても、興味深い項目を多数収録している。

(メモ) 柳田もこの「辞典」を愛読し参考にした。「柳田文庫」所蔵。

『ドイツ昔話辞典』は〈ドイツ〉に範囲が限られていたが、その後の種々の学問(文芸学、心理学、民俗学等々)の進歩と、今日の学際的かつグローバルな学問動向を踏まえて、ドイツの民俗学者クルト・ランケが中心となって、空前絶後の「百科事典」が構想された。はじめに紹介した『昔話百科事典』(以下EMと略記)がそれである。一九七七年の第一巻から、二〇〇八年の第十二巻Sの項目までが、現在刊行されている。

辞典や事典の類と並んで、昔話の比較研究の基礎を構築したのは「索引」類である。最初の索引は、フィンランド

の学者アンティ・アールネ Antti Aarne がドイツ語で作成し、一九一〇年に発表した『昔話タイプの索引』[Verzeichnis der Märchentypen]である。一九二八年には、アメリカの民俗学者ステイス・トンプソン Stith Thompson が、同索引の大幅な増補改訂版『昔話のタイプ』[The Types of the Folktale]を刊行し、この英語版は同じトンプソンによって一九六一年、さらに改訂され(以下、ATと略記)、久しく国際的なタイプ基準として利用された。そして最近、ドイツの口承文芸学者ハンス・イエルク・ウター Hans-Jörg Uther がATに基づいて、『国際的昔話のタイプ』[The Types of International Folktales]を英語で刊行した(「第一部」二〇〇四年)(ATUと略記)。

(メモ) 「柳田文庫」所蔵のATは、FFC (Folklore Fellows' Communications) 七四の一九二六年版である。

昔話のタイプとは別に、前述トンプソンが発表した『民間伝承のモチーフ索引』[Motif-Index of Folk-Literature]一九五五―五八年、全六巻も、昔話研究の比較研究に大きく寄与している。

(メモ)「柳田文庫」にはFFC一〇六一〇九の一九三二—一九三六年版が所蔵されている。なお、柳田の『日本昔話名彙』とAT(U)との比較等、「索引」の問題については論文で触れる。

柳田が昔話の「東西の一致」に着目してからEM刊行までの歴史を、以上、簡単に振り返ったが、辞典・事典や索引類がほぼ揃った現在(英語圏の辞典・事典類に関しては、論文で紹介する)、昔話(民話)は、柳田の予見どおり、ますますその「比較研究」を要請されている。

## B 比較民話学の〈目的〉と〈方法〉

『昔話百科事典』(EM)第八卷(一九九六年刊)の「比較研究」Komparastikの項、あるいはグリーンウッド『昔話／妖精物語百科事典』The Greenwood Encyclopedia of Folktales & Fairy Tales, USA, 3vols (二〇〇八年刊)第一卷の「比較の方法」Comparative Methodの項は論文で紹介することにし、ここでは比較研究の源流となった重要

文献を数点概観したい。

比較研究の出発点はそもそもグリム兄弟に求められる。兄ヤーコブはKHMを出版する以前からすでに、口承文芸の最も大きな特色として「類話」を挙げていた(グリム兄弟『メルヘン論集』、「初期論文」法政大学出版局)。類話は言うまでもなく比較によつてはじめて明らかになる。実際、KHM「研究ノート」篇の中で、弟ヴィルヘルムはヨーロッパ中世の説話集『ゲスタ・ロマノールム』、バジレの『ペンタメローネ』、『ペロー童話集』等々とKHM収録の昔話との比較対照表を作成している。前述アールネの『昔話タイプの索引』はこの方法を継承する試みである。そのアールネは『索引』の二年前、『昔話の比較研究』Vergleichende Märchenforschungen (一九〇八年)を発表した。いわゆる「地理・歴史的研究方法」を提示した著作である。さらに、同じフィンランドの民俗学者カール・クロンカール Krohn は、一九二六年、彼の『民俗学方法論』Die folkloristische Arbeitsmethode を刊行する。この二冊の名著の邦訳をここに紹介しておく。

\*『昔話の比較研究』A・アールネ著、関敬吾訳、岩崎美術社、一九八三(六九)年

＊『民俗学方法論』クローン著、関敬吾訳、岩波文庫、一九九五（四〇）年

（メモ）「柳田文庫」にはクローンの手書が収蔵されている。柳田のフィンランド学派研究の概要については『柳田国男とヨーロッパ』（三交社）所収の拙論を参照されたい。

ところでアールネは『昔話の比較研究』の中で、次のように述べている。

昔話研究は、昔話の原型、発生地、発生時期および伝播経路をみいだすことにつぎるものではない。「それがすんだのちにはじめて」、カールレ・クローンはかつて、おどけた調子でいていた、「本当の昔話研究がはじまるのだ」と。（邦訳、七二頁）

アールネによれば、昔話比較研究の究極の目標は、《地理・歴史的方法》の成果を媒介に、昔話を構成している諸要素、すなわち「民間信仰」や「習慣」を調べることにあり、さらには「民族心理学的諸現象」を説明することにある、と

している（邦訳、七二―七三頁）。

このうち、「民間信仰」に関しては、一九二七年から一九四二年にかけてドイツで刊行された今日なお最も詳しい『ドイツ俗信辞典』Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Hrsg. v. Hanns Bächtold-Stäubli unter Mitwirkung v. Eduard Hoffmann-Krayer, Walter de Gruyter, Berlin u. Leipzig 全十巻（以下HdAと略記）が最重要文献となる（二〇〇〇年に同社から再版が刊行された）。同『辞典』は、ドイツばかりではなく、ヨーロッパ全域および自然民族の俗信をも視野に入れた壮大かつ緻密なものである。

（メモ）「柳田文庫」に同『辞典』全巻が所蔵されている。詳しくは前述『柳田国男とヨーロッパ』所収の拙論を参照。

もう一つ、アールネが指摘していた「民族心理学的諸現象」については、右の『辞典』以外に、おそらくフランスの哲学者、社会学者レヴィ・ブリュール Lévy Bruhl が重要なヒントを与えてくれる。彼の『未開社会の思维』Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures, 1910-11『原始心性』La mentalité primitive, 1921は、昔話の比較研

究にとって、また後述するカール・グスタフ・ユングの「集合的無意識」の概念の背景として、看過できない著作である。

(メモ)「柳田文庫」には次の文献が所蔵されている。Primitive mentality, r. London, 1923 La mythologie primitive, 3<sup>ed</sup> Paris, 1935 レヴィ・ブリュール『未開社会の思惟』山田吉彦訳、小山書店、昭和一〇年(註 現在は岩波文庫、上・下二冊、一九八三〈五三〉年)

『原始心性』は英訳版が「文庫」に所蔵されているが、柳田は『郷土生活の研究法』の中で、レヴィ・ブリュールのこの「原始人心境」について語っている。ちなみに「原始」primitive は、彼が愛読したイギリスの人類学・民族学者タイラー Sir Edward Burnett Tylor のキーワードでもあった(『原始文化』Primitive Culture, 1871「柳田文庫」所蔵)。

ところで、未開人の「心性」mentalité (mentality) に注目したのは、人類学者や社会学者ばかりではなかった。スイスの心理学者ユングは彼のいわゆる「集合的無意識」

das kollektive Unbewußte の概念を構築するに際してこう語っている。「未開人の心理についていえば、それはレヴィ・ブリュールの「集団表象」という概念に当たるものである」(邦訳『元型論』―無意識の構造、C・G・ユング／林道義訳、紀伊国屋書店、一九八二年)。この「集団表象」representations collectives をユングはA・バステリアンの「要素観念」あるいは「原観念」Elementar-oder Urgedanken とも言い換えている。ユングの「集合的無意識」は「個人的無意識」から区別されるもので、「遺伝」に負っており、「元型」der Archetypus、すなわち「心」(魂=die Psyche)の中の「特定の形式」bestimmte Formen の存在を暗示している、とされる(「集合的無意識の概念」Der Begriff des kollektiven Unbewußten, 1936)。

ここで想起されるのは、昔話の「東西の一致」に関連して発言した柳田国男の次のような言葉である。

\*とうていその伝播の経路が分りそうもない話に、幾つとなき全世界の一致のあることを知ったのであった。  
『郷土生活の研究法』ちくま文庫版「柳田国男全集」28、八五頁)

\*私どもが驚いておりますことは、……二つの遠く離れたものが、かえって互によく似通っていることでもあります。『昔話と文学』同「全集」8、四三七―四三八頁)

口承文芸学では、昔話の伝播について、「移動理論」(ベンファイ／フィンランド学派)と「多元発生」Polygenesis説(W・グリム／タイラーなど人類学派／A・ラング等)が提唱されているが(M・リューティ『メルヘンへの誘い』「昔話研究の歴史」の章、政法大学出版局)、ユングの「集合的無意識」は特に後者の理論の深層心理学的な解明に一石を投じる概念として注目される。

まったく同じ時代に洋の東西に生きた柳田国男(一八七五―一九六二年)とユング(一八七五―一九六一年)は、直接的にはたぶん接点はないものの、当時の人類学、民俗学、社会学等の知識や情報を共有しながら、図らずも、類似的の想念を抱いていたのではあるまいか。両者を繋ぐミッシング・リンク(失われた環) missing link は、察するところ、彼らの学問構築に大きな役割を果たしたと推測されるレヴィ・ブリュールに求められるように思われる(論文

で詳述)。

「比較民話学」は、世界各地の昔話(民話)を読み比べながら、さまざまな地域や民族の思考や感性の特徴を観察し浮き彫りにすること、中でも、互いに離れた地域間の物語の「一致」(柳田の「東西の一致」)に着目して、その一致の根柢にある何かに思いを馳せること、その点に大きな課題あるいは〈目的〉があるであろう。各種の辞典・事典や索引が出揃いつつある中で、文芸学、民俗学、深層心理学、教育学等、種々の学問の成果を受容・応用して、口承文芸学の分野でそれらを総合する試みが、今後なされるべきであろう。その作業過程で、レヴィ・ブリュールの「集団表象」、ユングの「集合的無意識」等の概念が、〈方法〉上、重要な指針となるにちがいない。目下準備中の論文は、この問題を詳述する予定である。

## 追記

本「研究ノート」と準備中の論文は、「グローバル化時代に再編する日本の社会・文化に関する地域・領域横断的研究」および「グローバル化に対応した地域社会・文化の継承と再構築

に関する研究」(成城大学特別研究助成研究)の研究成果として発表するものである。お世話になったグローバル研究代表者・民俗学研究所長の松崎憲三教授、プロジェクトリーダーの上杉富之教授、事務局の小澤正人教授、大学院文学研究科長の田中宣一教授、および民俗学研究所主任の茂木明子氏に心から感謝いたします。